

二次元ぷち文庫

試し読み版

性隷剣士

エレナ

山本沙姫

表紙 / るていん

2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『性隷剣士エレナ 前編』  
『性隷剣士エレナ 後編』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



性隷剣士 **エレナ**

山本沙姫  
表紙／るていん

## 登場人物紹介

### Characters

---

#### エレーナ

ティリグ王国親衛隊の女剣士。守るものの為にはその身を汚すことも厭わない勇敢さを持っており、胸当てのみの軽装で戦う凛々しい姿から、「ティリグの猛き白鷹」と呼ばれている。

#### マリアン

ティリグ王家の姫。■いながらも国民を守る為にその身を捧げる高潔な精神を持っている。王の末娘の為、まだ■く、エレーナのことを姉のように慕い、傍に置いていた。

#### ガース

ティリグ王国を侵略した魔法帝国ジギャラットが有する赤、緑、黒、三つの軍団中、最強と恐れられる黒の軍団の指揮官。強大な魔力を有した魔法使いでもある。

#### ジル

ガースの下で調教師として働く妖艶な美女。

（くっ！ 追っ手が、こんなに……）

銚色の夕陽が輝く晴天の下、辺り一面緑の絨毯を敷き詰めたように果てしなく広がる草原の真ん中で、一人の女剣士が危機に立たされていた。

ギラギラと銀色に輝く鋼の鎧を纏い、2メートル近くはありそうな長剣を構えた、数十名の屈強な男達に取り囲まれて。

（これだけの数を相手にするのか、この剣で……）

サファイヤのように青く澄んだ瞳を、敵兵に対して真っ直ぐに突き出した愛剣に向ければ、目に映るのはボロボロに刃こぼれした刀身。長きに渡る孤立無援の戦いの連続で、ろくに手入れをする事もできなかったのだから無理もない。

だが先端だけは鋭さをまだ保っており、斬りつけるのは無理でも突きで応戦できそうではある。焼け石に水程度の、僅かな救いでしかないが。

「……くっ！」

目尻を、キツと吊り上げて相手を威圧して見せても、心の奥底に湧き立つ絶望的な状況がもたらす恐怖は打ち消せない。ボロボロに裂けた白いスカートから覗く、薄桃色に輝く張りのある太腿が自然と震えた。

「どうしたお嬢ちゃん。腰が引けてるぜ」

「へへへ、ちよつと前までの勇ましさはどこへ行ったのかなあ？」

余裕のニヤケ顔で呼びかけながら、敵兵はジリジリと間合いを詰めてくる。徐々に縮まる包囲網。周囲に身を隠せるような場所もなく、たとえ突破できても逃げきるのは不可能に違いない。

(反撃するか。でも、勝ち目は……)

いくら考えても、どう対処すべきか思いつかず苛立つ女剣士の神経を、時折吹く強い風が逆撫でして緊迫感を煽った。

ザワアアアアアアアア——。

短く切りそろえた柔らかい金髪をクシャクシャにかき回し、足元の草を揺らす乾いた摩擦音で、赤子の手の平に似た小さな耳に障る。

(いったい、どうすれば……)

柔らかい曲線を描いた頬に薄っすらと汗を浮かべ、引き攣らせつつも必死に逆転の手立てを考える彼女の名はエレーナ。ティリグ王国軍の親衛隊員として王族の人々を守つてきた剣士、であつた。

肉付きのよい170センチほどの体躯に純白の戦闘服を纏い、鎧は小さな胸当てだけという軽装な彼女は、身軽さを活かした素早い動きで戦う凛々しい姿から「ティリグの猛き白鷹」と呼ばれ、王族のみならず多くの国民から信頼と敬愛を集めていた。

だが今は、守るべき主君と祖国を奪われた拳句、征服者達に追われる身。

（こんな所で、朽ちるわけにはいかない。でも、イザという時は、やはり……）

数ヶ月前、ティリグ王国は禁断の力と強大な軍隊を所有する侵略国家、魔法帝国ジギヤラットによって征服され、捕らわれた王族の人々は行方知れずとなっていた。激しい戦乱の末、親衛隊の中でただ一人生き残ったエレーナは、奪われた主君達を探しつつ、残存兵力狩りの追っ手と戦い続けている。

しかし、戦時中に幾名かの名立たる武將を葬ってきたほどの剣術の達人とはいえ、たった一人の反逆がいつまでも続けられるはずもない。

（こんな雑魚兵、いくらいても相手するのはワケないはずなのに……）

たとえ刃の欠けた剣しなくても、幼少の頃から剣士として鍛えてきた彼女には、数が多いだけの敵兵の群れなら打ち破る自信はある。だが、迂闊に攻め込む事はできない。

なぜならば、彼らジギヤラット兵が装備する武具は、魔法の力で強化されている物だから。剣はリーチの長さもさることながら、一振りすればたとえ相手に触れなくとも、柔肌に刀傷の一つは付けられるほどの鋭い真空の刃を生み出すという厄介物。なりふりかまわずに飛び込めば、逆にこちらの身が危ない。

そして鎧は、大砲の直撃さえも弾き返すほどの強度と弾力性を兼ね備えている。並以下の状態の今の剣では、歯が立たないのは明らか。

（もはや、これまで……か……）

探し続けていた王族達の居場所を掴めぬ上、今や己の命は風前の灯。剣士となったその時から祖国のために、そして自身の誇りを守るため散る覚悟はできているものの、主君を助けられぬまま逝くのは心残りが大きすぎる。

目尻に微かな涙が溜まり、雫となつて落ちかけた。

「それにしてもいい女だねえ。どうだい？ 性奴隷として俺達に飼われるつていうなら、助けてやつてもいいぜえ」

心があきらめの色に染まりゆくその時、不意に髭面の若い大男が下品に鼻の下を伸ばし、舌なめずりをしながら呼びかけてきた。

「おいおい、こいつはワシらのリーダー、アルフレッド師団長を殺した奴じゃぞ。そんなわけにはいかんつて」

古参の戦士といった風格を漂わせた老兵が、大男の肩を叩きつつやんわりと釘を刺す。一見、任務中に不真面目な態度を見せる後輩を窘めているように見えるが、彼自身もまた、黒い瞳を邪な肉欲を滾らせてキラリと輝かせていた。

「だよなあ。実に残念だ……」

「ホントホント。美味そうな身体つきなのにねえ。もったいない……」

二人に呼応するかのように、ハアハアと荒い吐息交じりの呟きがそこかしこで湧き上がる。四方八方から降り注ぎ、全身に纏わり付く厭らしい視線と共に。



(こっ、こいつら……もしや……)

緩やかな曲線を描く鉄板に覆われていても、型崩れしないほどの弾力のある90センチオーバーの釣鐘型のバスト。

戦闘服の上からでも、はつきりとした括れがわかる引き締まったウエストに、丸々と張り出した熟れたスイカのようなヒップ。

まるで武具が強化されているだけでなく、魔法で鎧や服の中まで透視できるのかと錯覚するほどおぞましい視線が、若き乙女の初々しい肉体に突き刺さり、薄桃色のきめ細かな美肌がザワザワと鳥肌立っていく。

(わたしがみずから身体を晒して、命乞いするのを待っているのか……)

このまま戦ってもこちらに勝ち目はないのは、相手にもわかってはいるはず。にもかかわらず力押しで屈服させようとしなないのは、自分の肉体をできるだけ傷つけず手に入れて、きれいなままで堪能したいからに違いない。

敵の真意を悟った誇り高き剣士に、とるべき道は一つしかなかった。

「そうか……ならばせいぜい悔しがるがいいっ！」

眼光鋭く敵兵を睨み、雷鳴の如き勢いで怒鳴りつけると、エレーナは薄っすらと汗の浮いた喉元に愛剣の先端を当てる。我が身を悪党どもに汚させないために。

(姫さま。お助けできず申し訳ございません……)

死を決意した誇り高き剣士の脳裏を、王族の中で最も敬愛する少女の顔がよぎる。

『エレーナー……』

小鳥の囁りのように可愛らしい声と共に、背中まで届くサラサラの長い銀髪を靡かせつつ、まだあどけなさの残るふつくらとした幼顔に満面の笑みを浮かべて駆け寄ってくる愛くるしい姿が。

幼い頃から身分の差を越えて、自分の事を姉のように慕ってくれた国王夫妻の末娘、マリアン。生き別れになって以来、ずっと気にかけていた彼女を敵の手中に残したままにしてしまうのは、己が命を絶つより辛い事。

（あの優しいお方を、あの可愛らしい笑顔を、いつまでもお守りしたかった……）

しかし、もはや彼女を救う手立てはない。己が誇りのためだけでなく、救えなかった事を我が命で償おうと、愛剣を握る手に力を込める。

「んっ！」

パチインッ！

だが未練を振り払い、喉元を貫こうとした瞬間、どこからともなく響いてきた甲高い打撃音が耳に突き刺さる。同時に全身に強烈な悪寒が走り、凍りついたように動けなくなってしまった。

（何だ、これは……）

「ククク、そう簡単に死なせはせんよ。劍士エレナ殿」

戸惑う美貌の劍士の目の前で、彼女を取り巻き囃し立てていた軍勢が水を打ったように静まり返り、サッと左右に分かれる。そして彼らの背後から、頭からスッポリとフード付の黒衣を纏った小柄な男が歩み出てきた。

(……こいつ、魔法使いか。それもかなり強力な……)

自分の肩あたりまでの身長しかない体軀ながら、そこいらにいる魔法の力を借りているだけの雑兵とは比べ物にならない威圧感を漲らせた不気味な男。彼が術をかけて動きを止めているのが、感覚的にすぐわかった。

フードに隠れて、灰色がかった肌の皺のよった口元と、鋭い鷲鼻しか見えず表情がわからないのが、滲み出る異様な雰囲気により一層拍車をかける。

「ガ、ガースさま……。まさかみずからお出ましになられるとは……。やつ、やはり、ご子息の仇はご自身の手で、討たれたいという事、ですか……」

すると、真っ先に邪な欲望を口にした大男が、愛想笑いを浮かべつつ黒衣の小男の背後に回り込む。任務中のふざけた言動を聞かれ、罰を与えられないか不安らしい。

だが、その震える分厚い唇から飛び出した名は、勇敢な女劍士をも青ざめさせた。

(ガース!? こっ、こいつが、黒の指揮官……)

目の前にあらわれたのは、赤、緑、黒、三つの軍団で成り立つジギヤラット軍の中で最

強の集団である黒の軍団の指揮官にして、帝国屈指の魔法の使い手。

そして、エレーナが討ち取った敵将の一人、アルフレッドの父親でもある。

(こんな大物まで、出てくるなんて……)

伝え聞く話では、強大な魔力の持ち主は、相手の心臓が止まる瞬間まで意識を持たせたまま苦痛を与える殺人術が使えるという。ある者は肉体を少しずつ捻じ切り、またある者は内臓をすべて引きずり出すなど、その残酷な手口は様々。

息子の敵討ちに来たとあれば、どんな残酷な手段を講じてくるか想像もつかない。

「くっ……」

血の気の引いた額に冷や汗が滲み出て、恐怖のあまり引き攣った膀胱がジワジワと尿意をもたらししていく。恐れおののくエレーナの目の前までたどり着いたガープスは、骨の浮き出た痩せ細った手で頬に触れてきた。

「確かに、お前は殺してもまだ足りないぐらい憎い女だ……」

ガサガサの手の平で柔肌を撫で回しつつ、話しかけてくる彼の口調は抑揚がなく淡々としており、言葉とは裏腹に激しい怒りは感じられない。しかしそれがかえって、何か途方もない事を胸に秘めているようで恐ろしい。

(こ、殺される……)

胸の鼓動が激しく高鳴り、息が詰まる。

「だが、これほどの器量よし、殺すのは惜しい。部下達が言うように性奴隸として我が軍の兵士に尽くす事で、アルフレッドを殺した罪を償わせるのも悪くはない。どうかな？ 剣士殿……」

「な……に……」

敵とはいえ、仮にも軍の指揮官に立つほどの男が雑兵達と同様に下賤な要求を、よりによつてこの世で最も憎いであろう者に出してきた事にエレーナは驚きを隠せない。

無論、そんな戯言に貸す耳はなかった。

「断る！ そんな恥を晒してまで残したい命は持ち合わせてないわ。さっさと殺すがいい！」

精一杯の虚勢を張つて言い放つものの、やはり残酷な処刑への恐怖は拭いきれない。

チュルツ……。

(くっ……)

震える秘唇から生暖かい尿が漏れ、スカートの下でドロワースを微かに湿らせる。

「そうか、それは残念だ。聞いた話では剣士殿はマリアン姫を探しているという事だが、もし、その身体で償うというのなら会わせてやつてもよいと思つていたのだがな」

「ええっ!? マ……マリアン姫、さまに……」

だが、忌むべき敵将の口から出た思わぬ条件に、己の誇りのためみずから死を選んだ勇

敢な剣士の心が揺らぐ。これまでいくら探しても行方が掴めなかった主君の居場所がわかるといふのなら、助け出せる可能性はゼロではない。

このまま無駄に命を捨てるよりは、僅かでも状況は好転するはず。

(しかし、そのために……わたしの身体を……)

しかし、守るべき王族の人のために命を捨てられるほどの忠誠心旺盛な親衛隊員とはいえ、根はまだうら若き乙女。さつきから血走った目で自分を見つめる汚らわしい男どもに、我が身を弄ばれるのは死ぬより辛い屈辱であった。

(……いや、わたしはティリグの剣士。たとえこの身がどうなろうとも、主君に尽くすのが宿命だっ！)

胸の奥に湧き立つ迷いを振り払うと、エレーナは下腹部に力を込め、威圧的な口調で言い放つ。

「本当だな！ きさまらの言う通りにすれば、本当にマリアン姫に会わせるのだなっ！」

「うむ、もちろんだとも」

妖しく口元を歪めて告げると、ガープスは指を弾く。

パチン！

「あうっ！」

ドサッ！

動きを止められた時と同じ打撃音が耳に入り、美貌の剣士は強張っていた全身から力か抜け、その場に崩れ落ちた。

「では早速、性奴隷になるための儀式をしてもらおう」

「ぎ、儀……式……？」

剣を手から落とし、地面に跪くエレーナを見下ろす黒衣の魔法使いは、さつきまでとは打って変わった高飛車な口調で命令を下す。術を解かれ、身体が自由が利くはずなのに、フードの下に隠れた目で射竦められているようで身動きがとれない。

それ以前に、儀式と言われても何をすればいいのかわからなかった。

「おお、王家親衛隊の剣士殿ともなれば知らぬのも無理はないか。どれ……」

人を小ばかにしたような厭らしい笑みを浮かべると、ガープスはまたも指を弾く。

パチン！

「……何……こっつ、これは……」

すると頭の中に、悲惨な光景が次々と浮かび上がってきた。

（……魔法で、今までにこいつらがやらせてきた、儀式とやらの様子を送ってきているのか……）

卑劣な男達に取り囲まれ、みずから秘所を露出して地に這い蹲る若い娘達。誰もが目から止め処なく涙を溢れさせつつ卑猥な言葉を言わされた後は、無理矢理抉じ開けられた乙

女の花園の中へ、いきり立った醜悪な肉槍を捻じ込まれていく。

（こんな……こんな……酷い事を……）

あまりに破廉恥な要求に、誇り高き剣士はすぐさま愛剣を拾い、玉碎覚悟で立ち向かいたい衝動に駆られる。しかしここでヘタな事をして、せつかく挿んだ姫さま救出のチャンスを逃しては元も子もない。

「どうした！ 早くせぬか！」

目を閉ざしても、耳を塞いでも消せないおぞましい光景に戸惑っていると、黒衣の魔法使いが一喝してきた。地鳴りの如き怒号に、思わず背筋が震える。

刃向かう術をすべて奪われ、もはや迷う事は許されない。

「くっ……」

覚悟を決めた女剣士は己のプライドを捨て去り、口を真一文字に閉ざして震える指でドロワースを膝元までずり下ろす。そして前屈みになって戦闘服のスカートを背中までめくり上げた。

「おおーっ、いいケツしてるなあ……」

「剣士殿は毛が薄いのお。一番美味しい所がよく見えるわい」

すると途端に、背後から下品な歓喜の声がドツと沸きあがる。いつのまにか包囲そつちのけで後ろに回り込んでいた兵達が、曝け出された乙女の秘所に釘付けになっていた。





「ようこそ、調教部屋へ。アタシはジル。この城の専属調教師さ」

赤毛の美女は妙に馴れ馴れしい態度で話しかけてくるが、その漆黒の瞳はまるで獲物を狙う蛇のよう。背筋が自然と震えるエレーナは、睨まれた蛙のように身体が強張ってしまう。

「ち、調教……?」

「捕まえた女を、ワシ好みの性奴隷に仕立ててもらっておるのだよ。では、仕上がりを楽しみにしておるぞ」

「お任せ下さい、ガーブさま」

戸惑う彼女を気にも留めず、軽くやり取りを済ませると黒衣の魔法使いは鎖を女調教師に手渡し、スタスタと部屋から出ていった。

「さーて、あなたは特に念入りに調教してやるわ。何せ、アタシのフィアンセの仇、だからね……」

ジャラジャラと鎖を鳴らしながら部屋の真ん中まで引きずりつつ、ジルは口元を歪めて語りかけてくる。

「フ、フィアンセの……仇? いったい……」

唐突に振られた身に覚えのない話に、エレーナは嫌な予感を覚えつつ顔を引き攣らせて問いかける。

「……あんたが殺したアルフレッドの事よっ!」

眼光鋭く睨みつけて怒鳴ると、怒れる調教師は鎖を天井から吊るされた大きな滑車に通す。

(くっ！ このまま、絞首刑にでもする気か……)

ようやく捜し求めていた姫との再会が叶った途端に、予想だにしなかった危機が迫る。だが、彼女はかろうじて足が届く高さまで鎖を引き上げた所で滑車を針金で固定するに留めた。

「ふふふ、驚いたようね。言ったでしょう、アタシは処刑人じゃなくて、調教師だって」  
長い爪で頬を軽く擦りながら、ジルはケラケラとからかい半分に笑いながら話しかけてくる。婚約者の仇である自分にふざけた態度を見せるのが、捕まえた虫の羽根や足をむしり取って遊ぶ無邪気な子供のようでかえって恐ろしい。

(くっ、こいつめ……)

「でも、このまま首を吊りたくなかったら、まずはおとなしく脱ぎなさい。そのために両手を自由にしてあるんだから」

パァンッ！

相手の出方がわからず混乱していると、女調教師は乳房を力いっぱい平手打ちしつつ命令してきた。

「ぐうっ！」

打たれた衝撃で身体が揺れ、軽く首が絞まる。

(ここは、おとなしく従っておかないと、本当に殺されるかも。そうしたら、姫さまが……) 死への恐怖より、敬愛する姫君を守りたい一心で、誇り高き剣士はその二つ名の由来である純白の戦闘服を脱ぎはじめた。

「くっ……」

震える手で上着のボタンを一つ一つ外し、足元に脱ぎ落とすと、上向きにツンと尖った乳首を頂いた釣鐘型のバストが大きく波打ちながら飛び出す。だが、いくら同性相手とはいえ、忌むべき敵に肌を晒すのは躊躇われる。

「へえ。下賤なティリグの女にしては、随分といいモノ持つてるわね。アタシほどじゃないけど」

グニユッ!

するといきなり、赤毛の調教師は剥き出された乳房を握り締めてきた。

「あうっ！」

恥ずかしさと屈辱感で、微かに赤みを帯びた柔肌を押さえつける指がウネウネと蠢き、パン生地のように捏ね回される。

ギリッ!

「ひいっ……」

時折食い込む長い爪が、胸の奥までチクチクと痛みを伝えてきた。

(こつちが抵抗できないのをいい事に……このままじゃ、済まさないわ……)

「ほらほら、次は下だ。こう見えてアタシは気が短いんだから待たせるんじゃないよ」

思わず漏れかけた喘ぎ声を飲み込みつつ、怒りの炎を燃え上がらせるエレーナを気にも留めず、ジルは軽く鎖を揺らしてしきりに催促してきた。

「……」

反撃する手立てを持たない捕らわれの女剣士は、ただ言われるままに生まれたままの姿を晒すしかない。足首まであるロングスカートをずり下ろし、縦割れの小さな臍を真ん中に据えたなだらかなお腹と、染み一つない白く長い足を曝け出し、最後の一枚に手をかける。

「さっさとその黄ばんだドロワースも脱ぐんだよ！」

「うっ、五月蠅い！ わかってるわよ……」

まるで、昨日ガープスの恐ろしさに失禁してしまったのを見透かすような一言に、エレーナは思わず顔を真っ赤にして金切り声を上げてしまう。そして、手をかけた下着をスルスルと下ろし、薄い金髪に微かに隠れた乙女の丘を曝け出した。

「はい、よくできました。こつちも金髪なのね、きれいでちよつと羨ましいわ」

股間の前に腰を下ろし、じつくりと毛穴の数まで数えているかと思うほど凝視しながら話しかけてくる。

(こんなにジロジロ見られるなんて。しかも、あんなに厭らしい目で……)

同性でありながら、女調教師の視線は肉欲を滾らせた男どもにひけをとらないほど鋭く、敏感な表皮をチクチクと突き刺す。さらに吐きかけられる生暖かい吐息がくすぐったい。指先一つ触れていないのに、ヴァギナの奥底まで弄くり回されているような奇妙な感覚が、下腹部の中を駆け巡る。

「……」

股を閉ざしたくても、ヘタに逆らえば余計に酷い事をされそうで身体が硬直してしま  
う。

「でも、これは調教に邪魔なのよねえ」

ササッ！

「うっ！」

軽く陰毛を指先で撫でてから立ち上がると、ジルはおもむろに近場に放り出してあった短刀を手にする。そして刃先を、赤みがかつた柔肌の上に当てた。

「ひっ！」

ゾリリッ……。

乙女の最も敏感な部位に冷たい金属が触れ、全身が鳥肌立ったその瞬間、刃が柔肌の上を滑り、僅かに生い茂る黄金色の若芝を刈り取った。

「動くとかゲガするわよ。おとなしくしてなさい」

ゾリッ、ゾリゾリゾリゾリリリ……。

立て続けに鋭い刃が走り、乾いた摩擦音を上げるたびに、なだらかな股間を覆う大人の女の証が奪われていく。

「くううつつ……」

口を真一文字に閉ざし、涙が零れ落ちそうになるのをグッと堪えながら、エレーナは恥辱の責めにひたすら耐える。いつの日か、大切な人を助けるチャンスを迎えるために。

「ふふふふ、できたわよ。ガープスさまのをぶち込まれたにしては、まだまだきれいねえ。さあーて……」

ほどなくして剃毛が終わり、乙女の秘所が完全に剥き出された。上端に軽く隆起したクリトリスが顔を覗かせるクレヴァスをじっくり見つめながら、ジルはまたもからかい口調で話しかけてくると、傍らに置かれた火鉢から鉄棒を二本引き抜く。

「そ、それは……」

先端に付けられた、真つ赤に焼けた何やら彫刻の施された鶉の卵ほどの小さな円板が迫るのを目の当たりにして、エレーナは自分の身に迫る危機を瞬時に悟り、恥辱で朱に染まる肉付きのいい身体をガクガク震わせた。

「ちよつと熱いけど、我慢するのよっ」

ジユツ！

「あうっ！」

二つの円板が左右の乳首の下に同時に押し付けられ、柔らかな乳房の中を激しい熱さと痛みが駆け抜ける。

「ひいいいっ！ かはっ！ ああっ！」

顎を上げ、短い金髪を振り乱しながら叫んでみても、冷酷な調教師は押し付ける手を緩める気配はない。戦いで受けた傷からは感じた事のない痛みが捕らわれの女剣士を襲い、熱のせいで白い乳房が徐々に赤みを増していく。

「ふふふ、うまく押せたわよ。ほら」

しばらくして鉄棒が離されると、円板を押された薄桃色の柔肌に、小さな赤いバラの花がクッキリと描かれていた。

「なっ、何をするっ！」

あまりに酷い仕打ちに、怒りの炎を燃やす女剣士は目の前で神経を逆撫でするかのようにお気楽に振舞う調教師を睨みつけて怒鳴り散らす。

「あらあら、あなた、性奴隷になったんでしよう？ 奴隷の証を身に着けるのは当然じゃない」

しかしまるで動じる様子を見せない彼女は、新たに火鉢から鉄棒を引き抜くと今度は背



後に回り込む。

「まつ、まだやる気か！ いいかげんに、あぐうつ！」

ジユジユジユツ！

振り返り、制止しようとした瞬間、今度は肛門まわりに激痛と高熱が走る。双曲の谷間にひっそりと咲く菊の花の上に、こげ茶色のバラが花開いた。

「ひあつ、ああああ——つつつつ」

「はははは、いちいち反応が可愛らしいわねえ。さて、次はどんな声を聞かせてくれるかしら？」

三つ目のバラを咲かせ、嬉々として目の前に戻ってくると、ジルは火鉢に残された最後の一本を抜く。そして再び、股間の前に腰を下ろした。

「まつ、まさか……それを……ひぎいいつ!!」

ジジユユーツツツツ！

答えを聞く暇もなく、クリトリスの右隣に意識が飛ぶかと思うほどの激痛が走り、肉のクレヴァスの内側まで火中の栗のようにはじけ飛ぶ。

「ぐつ、ぎひいいいいい——つつつつつ！」

ジャラジャラジャラ……。

「ここは大事な所だから、念入りに付けないとね」

鎖が引き千切れそうなほど大きく身体をくねらせて悶え苦しむエリーナにかまわず、ジ  
ルは先端が柔肌に突き立てた鉄棒を押し込んでくる。

(いっ、いつまで続ける気だ……)

「……よしっ、上出来だわ」

しばらくして焼印が外されると、胸に押されたものより二回りほど大きなバラが、鮮やかに刻み込まれていた。

「ううっ……こっ、こんな印を付けたぐらいで、わたしの心まで支配できると思うなよっ！」

嗚咽が出かかるのをグツと堪え、エレーナは金切り声を上げる。しかしあいかわらず調教師は意に介さず、やけにお気楽な態度で話しかけてきた。

「こんな印ねえ。でもね、これはタダの焼印じゃないのよっ！」

甘ったるい口調で耳元で囁くと、揃えた人差し指と中指の先を軽くペロリと舐めて、尾てい骨の上をクルクルと撫で回す。

ビゲンッ！

「ひいっ！ い、今のは……いったい……」

すると尻の谷間の上を毛虫が這い回るようなくすぐったさが駆け抜けて、肛門の周りでグルグルと渦を巻く。

「まだまだ、ここはどうかしら？」

さらに続けて、親指で太腿の付け根を押されると、今度は股間から間欠泉の吹き上がりを髣髴とさせる熱さが、脳天へ向けて一気に突き抜けた。

「はうっ！ まっ、また……」

「予想以上に効果があるわね。こっちはどうかしら？」

謎の言葉を投げかける妖艶な調教師は、興奮気味に漆黒の瞳をギラギラと輝かせながら、両手をまだ熱さと痛みの治まらない豊満なバストへ伸ばしてきた。

ギニユツ！

グリイツ！

「ひぎいいいっ！」

左右の乳首に爪が立てられ、軽く外向きに引つ張られると大きな乳房の中を強烈な痺れが湧き上がり、股間へ向けて一気に駆け抜けていく。

「わかったかしら？ この魔法の焼印にはね、押された所の周りの感度を高める効き目があるの。どう？ 感じるでしょ？」

子供のようにな无邪気な、それでいて瞳には邪悪な輝きを湛えながら話しかけてくると、ジルは細い指に力を込めて、引き千切りそうなくらい強く締め付けてくる。

「かはっ、あうっ……」

(なっ、何なの……この、感じ……)

痛みと痺れが渦巻く巨乳の中で、徐々に奇妙な感覚が目ざめはじめる。肉体を内側から溶かすような、むず痒い心地よさが。

「あふうんっ……くうっ……」

(こっ、これが……焼印の、効……果……)

止め処なく広がる快楽に抗い、エレーナは唇を噛んで幾度となく口を突いて飛び出そうになる艶かしい吐息をグツと飲み込む。

「あらあら、随分としぶといわねえ。だったら、これでどうかしらっ！」

ビシィッ！ バシィッ！

華奢な手の平が、左右から鞭のように鋭く振られて硬く尖った乳首にヒットし、波打つ巨乳の中を強烈な電撃が走る。

「ひっ、ひやあああああ——つつつつ」

パシヤーッ！ パシヤパシヤパシヤパシヤ……。

胸の痺れに引きずられるように股間が震え、大きく開いた肉穴から黄金色の小水が滝の如く流れ落ちた。

「あ、ああ……そんな、な……」

「うふふ、乳首だけでこんなに反応するなんて、出足は上々ね。これはアタシの最高傑作

に仕上げられそうだわ……」

耐えがたき醜態を晒したショックで意識が遠のく中、ぼやける耳でエレーナは邪悪な調教師の意味深な独り言を聞いた。

「ここが今日からお前の住み処だ。ちよつと暗いかもしれんが、我慢しろよ」

調教室から解放されたエレーナは、鉄格子のはまった窓が一つあるだけの石造りの部屋に放り込まれた。

「くうっ……」

柔肌を焼かれ、プライドまでズタズタにされた剣士は、ただグツタリと冷たい床に身を横たえるしか、傷ついた心と身体を癒やす事ができない。

(ここまで、酷い目に遭わされるとは……)

マリアン姫を助けるため、辱められる覚悟はしていたもののやはり若き乙女には荷が重すぎた。

「エ、エレーナさま……」

すると打ちひしがれる女剣士の目の前に、長い黒髪を二本の三つ編みに束ねた痩せ型の娘が駆け寄ってくる。

「……あ、あなた……侍女頭の……」

「はい、ジャスミンです。また、お会いできて……光栄ですわ」

あらわれたのは、親衛隊として王族の警護にあたっていた頃に毎日顔を合わせていたマリアン姫のお世話係だった。無事とは言いがたい再会に、何と言つていいかわからず、戸惑っているのが見て取れる。

「よかった。生きていて……城が落ちた時、さらわれた王族以外は殺されたかと……あ……」

ふと辺りを見回せば、そこかしこに見覚えのある顔が。テイリグ王家に仕えていた侍女達、それも、若く美しい娘ばかりが集められている。彼女達の身に何があつたかは、身に着けているボロボロに裂かれた黒いメイド服と疲れきつた表情から容易に想像がついた。

（みんなも、姫さまと同じ目に……あいつら、絶対に許さない！）

主君だけでなく、彼女達も助けたい思いが胸に湧き上がる。心の傷を吹き飛ばし、消えかけた闘士を再び呼び起こすほどに。

「くっ、ぐうっ……」

性奴隷にされて三日目の昼、エレーナは再びジルの調教室にいた。着衣をすべて剥ぎ取られ、背中に回された両手共々乳房をきつく縛られた拳句、股が裂けそうなほど大きく足を広げられた状態で天井から逆さまに吊るされるといふ無残な姿で。

(とにかく今は、こいつに従うふりをしていないと……)

無論、いくら武器を奪われたとはいえ、ただ黙って辱めを受けていたわけではない。すべては、敬愛する姫君を救うまでの辛抱と言いつ聞かせ、勇敢な女剣士は懸命に耐えた。

「はははは、ティリグの白鷹とやらも、こうなつてしまつては惨めなものねえ」

手に黒革の鞭を握り締めた女調教師が、周りを歩きながら吊るし上げた獲物に勝ち誇つたように呼びかける。柔肌にナメクジが這い回る、ヌメヌメとした感触を纏つた視線を送りつつ。

(こ、これも……魔法の焼印のせい、なのか……)

薄っすらと汗ばむ肉体の、特に印を付けられた乙女の三大聖域が異様にむず痒い。引き絞られた巨乳の突端と、左右に広がったでん部の中心に咲く紅色の菊花が、ジユクジユクと疼く。

そして無毛の丘に広がるクレヴァスから顔を覗かせる肉粒が、プツクラと膨れるほど充血して微かに痙攣をしながらはじめていた。周りを覆う赤い肉のバラを、爽やかな柑橘系の香りを漂わせた恥蜜で濡らしながら。

「さーて、それではそろそろはじめましょう、ねっ！」

ヒュンッ！ ビシィッ！

「はあっ！ くううつつ……」

背後で鋭い風切り音が響いたかと思つた瞬間、丸々とした桃尻に強烈な激痛が走る。柔肌の表面を走る激痛と共に、痺れが皮下神経を通つて肛門まわりに集まり、タンポポの綿毛で擦られるかのようなくすぐつたさを押し付けてきた。

(なつ、何！ 今の感じ……)

痛いのに心地いい、今まで受けたことのない感覚を肉体が味わい、エレーナは驚きを隠せない。呆然と目を見開く彼女に、鞭の連撃が次々と飛ぶ。

バシッバシッ、バシッバシッ……。

弾力のあるでん部を、右から左から打ちのめし、時には真上から一文字に振り下ろした鞭が、双曲の谷間へ直接ヒットする。

「くつ、うつ、あうつ……」

唇を噛み締めて無様な叫びは上げまいとエレーナは堪え続けた。しかし乙女の肉門を襲う衝撃はあまりに強く、時には苦しい叫びを上げてしまう。

(こつ、こんなの……耐えられない……)

「どう？ 少しは気持ちよくなつてきたかしら？」

激痛と未熟な快楽に翻弄されても、なお耐える誇り高き剣士の胸の内を知つてか知らずか、ジルは正面に回り込み、軽く首を傾げ蔑んだ目付きで見下ろしながら不敵な態度で問いかけてくる。



「なっ、なるわけ……ないでしょっ！」

心を見透かされたような質問に一瞬たじろぐものの、エレーナは弱みを見せないよう、キツと尻を吊り上げて睨み返す。しかしいくら強がつて見せても、無様に吊るされていは相手が怯むはずもない。

むしろ、火に油を注ぐばかり。

「なかなかしぶといねえ……！　そうだ、面白い事考えた。どう、アタシと賭けをしてみない？」

紅色の長い舌でペロリと唇を舐め回して、やけにウキウキと嬉しそうな口調で言うと、ジルはテーブルの上に乗せられた燭台から30センチほどの長さの太いロウソクを一本引き抜き、火を灯す。

「賭け……だと？」

何を仕掛けてくるかわからず、漠然とした不安に駆られるエレーナは思わず全身に力を込めて身構えてしまう。鞭打ちで腫れて、ヒクヒクと痙攣を起こして開きかかった肛門が、自然にギユツと窄まった。

「あら、そんなに力を入れると、かえって痛いわよ」

逆さ吊るしの性奴隷からの質問を無視して、妖艶な調教師は手にした極太ロウソクを吊るし上げた獲物の尻穴にあてがった。

「ひぐっ!!」

火照った肉穴に触れる、固く冷たいロウの塊に桃尻が鳥肌立ち、背筋が思わず震える。

「さあて、はじめるわよ……」

興奮気味に上擦った声で呼びかけると、ジルは手首を捻り、握ったロウソクの下端で引き締まった菊門を挟じ開けはじめた。

グリッグリッグリッグリッ……。

「やっ、なっ、何をすするっ!」

異物の挿入を食い止めるべく、エレーナはさらに肛門を引き絞るものの踏ん張りがきかない宙吊り状態では、なかなかうまく力が入らない。

コリックリックリックリッ……。

「だっ、だめえっ!」

おまけに押し付けられた魔法の焼印を擦られるのがこそばゆく、自然と菊門が開きはじめてしまう。

「んふっ、そうそう。力を抜いていれば楽に入るわよ」

皮肉めいた口調で呼びかけながら、ジルはロウソクを握る手に力を込めて、激しく痙攣する肉穴の中へ押し込む。

ヌブッ!

「ひいっ！　そ、そんなの、入れる……な……あんっ!!」

ついに、ニンジンほどはありそうな太さのロウソクが乙女の菊花を貫き、直腸の中へ侵入を開始する。

(こっ、こんなものまで、入れられるなんて……)

いくら固く張り詰めていたとはいえ、人体の一部だけあって昨日押し込められたガープスのペニスには、表面に多少なりとも弾力があつた。しかし今押し込められているロウソクはカチカチに固く、まるで鉄棒でも入れられているよう。押し広げられる肉のトンネルが、ズキズキと痛む。

「やっと入った。でも、これぐらいじゃすぐに倒れちゃうわね」

粘り気のある口ぶりで囁きながら、残酷な調教師はさらにロウソクを押し込んできた。

グリッグリグリグリッ……。

「かはあつ！　くううううう……」

(さ、裂ける……う……)

先端で直腸壁を押し広げつつ攻め込んでくる異物が、先へ進めば進むほど、同時に妙な感覚を芽生えさせていく。肉体の内側を捏ね回されるような、少しむず痒い感覚を。

(ま、また……どうして、こんな……)

「ま、こんなもんかしら」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**